

	みずみどり	2004年7月15日 第43号
		発行：いたばし水と緑の会 事務局
		年会費 2,000 円 郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会
		<a href="http://homepage3.nifty.com/mizutomidorinokai/">http://homepage3.nifty.com/mizutomidorinokai/</a>
		E-mail : <a href="mailto:mizumidori@nifty.com">mizumidori@nifty.com</a>
		〒174-0063 板橋区前野町 5-31-7 瀬田方 tel&fax3969-7124

## ニイニイゼミを聞きましたか

7月も半ばとなり蝉が鳴きだす頃ですが、もう今年聞きましたか。春からの気候で、蝉の出る時期が変わるのかも知れませんが、私が北野神社付近で初めて聞いた日は、7月下旬の梅雨明け頃です(一昨年は梅雨明けが7/20で初聞きが7/21、梅雨が明けなかった冷夏の去年は7/29でした)。アブラゼミやニイニイゼミ、年によってはヒグラシも早く鳴きだしますね。

蝉はカメムシ目セミ科昆虫の総称で、細長い口(吻)で草や木の汁を吸う、害虫の仲間(沖縄地方のクサゼミはサトウキビの害虫)なんですよ。大きいのは体長7センチ位のクマゼミやエゾゼミから、小さいのは2センチ位のチツゼミまで、日本に30種類以上いるそうですが、板橋ではせいぜい7,8種類しか出会えないようです。西日本にしかいなかったクマゼミが何年前に箱根を超えて、東京でもたまたま聞けるようです。

セミの名前は鳴き声(聞きなし)から付けたと思われるもの(ミンミン、カナカナ{ヒグラシの別名}、ツクツクボウシ、ニイニイなど)、外見から付けた(アブラ、ツノや、ヒメ・クロ・ツマグロなど



赤塚公園(城址)でトラップを使って昆虫調査をしたときに会ったミンミンゼミの羽化(2003年8月20日)

を付したもの)のほか、生息する土地名を付したもの(エゾ・オオシマ・オガサワラなど付したもの)、発見者の名前(イワサキ・クロイワ)の付いたもの、発生する時期や周期で名づけた(ハルゼミの仲間や、今年アメリカで大発生 of 17年ゼミ)があります。

ゼミは幼虫時代を地中で長年過ごすことで知られていますが、上記の17年ゼミは13~17年目に、アブラゼミやミンミンゼミは大体7年目(卵から数えて)で出てくるのが多いようです。

アブラゼミは樹に穴をあけて産卵、冬を卵で越して翌春(6~7月)に孵化し、地中に潜り込むとのことです(幼虫で越冬する種もあるとか)。地中では木の根から樹液を吸って大きくなり、5齢(4回脱皮)で真上に穴を掘って出てくるそうです。ですから、幼虫が地中に入った後で地表が舗装されてしまうと、幼虫が地上に出ることが出来ない、という可哀想な事も考えられます。

地上に出ても前進し(後戻りできず)、草木に這い上がり羽化し、3日ほどで鳴きだし飛びまわってカップル相手を見つけ、8~9月に産卵して一生を終えます。

ゼミの抜け殻(うつ蟬とも言う)で種類が分かるが、泥がついたニイニイゼミ以外は薄茶色で光沢があり、よく似ているので同定するのは難しいですね。

子供の頃は、田畑の畦や川岸などに植えられたハンノキの稲架木などにゼミが沢山いたので、低い処にいるのは素手で、高いところにいるゼミ捕るには、手製の竹ざおを使いました。これは竹竿の先端を二つに割り、ここに10センチくらいの棒を挟み込んで広げ、出来た三角の空間に蜘蛛(軒下のオニグモが最高)の巣を絡げたもので、蜘蛛の糸を巻きつけたところをゼミの背後から、そっと押さえつけて接着させる方法でした(懐かしいなー)。

自然界にもゼミの外敵はいて、アブラゼミがカマキリやヤブキリに捕まえられ、木の高いところでギーギー泣き喚いていたり、蜘蛛の巣に絡まって泣き喚いている情景に、よく出合ったものです。アブラゼミが子供の虫かごに入れられて、電車の中で突然鳴き声を出し、周りの人を驚かせたのも真夏の風物詩でした。

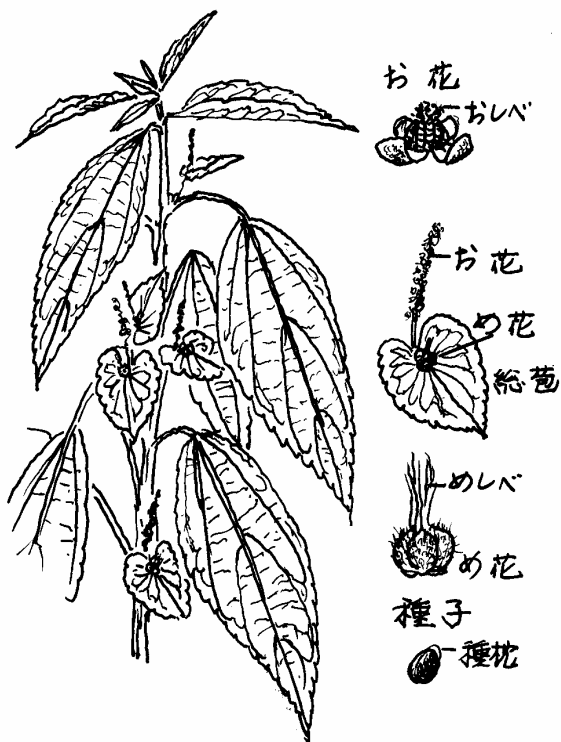
徳丸でも40年位前は、高島平が田んぼで、台地部に畑や植木畑や沢山の屋敷林があり、崖線の林も広がった頃に比べて、宅地化が進み道も舗装されて土の出ている面積が減り、蟬の数も本当に減ってしまいました。樹木も多くゼミが沢山いたのでニイニイゼミなどは素手で簡単に捕まえられました。しかし、中でも一番身近にいたニイニイゼミが減ってしまったのを痛感します。

自然を取り戻そうとか、トンボや蛍を復活させようなどの地域活動はありますが、蟬を増やそうという運動は聞かないですね。都市部で樹木を増やす(減らさない)ことが蟬の復活に通じるのかもしれない。庭木や電柱、隣家の外壁にアブラゼミが止まって鳴いてくれるのを今年も楽しみに待っています(猪鼻 昭二)。

追記:7月9日、ニイニイゼミとカナカナの鳴くのを今年始めて聞きました。

## 季節の観察メモ

# エノキグサ より確実に



道端などに見られるごく普通の一年草。葉の形・色・艶・葉脈までエノキにそっくり、名づけてエノキグサです。しかし、エノキはニレ科、エノキグサはトウダイグサ科で、全くの他人の空似です。トウダイグサ科は、トウダイグサやノウルシなど、皿のような総苞の上に花が乗っていて、ちょうど燭台に蝋燭を立てたような形です。エノキグサのこの総苞は特異な形をしていて、ちょうど二つ折りにした編笠のようです。そのため、アミガサソウとも呼ばれています。

エノキグサは雄花と雌花が別々で、編笠の中から細い花穂が立って砂粒より小さな丸い雄花がびっしりついていきます。4枚の花被(がく)も小さく、虫眼鏡でないと見えません。一方雌花の方は、雄花の花穂の根元、編笠の折り目の所に1~3個ほど乗っています。花被は3枚、めしべの先は毛のように割れています。開花し花粉が熟す頃、雄花はパラパラと編笠の上に散り、中心の雌花の所に転がっていきます。そして花粉が直接めしべにつく仕組みになっているとのこと。

植物には、閉鎖花や受粉できなかった最後の手段としておしべとめしべを接触して受粉するものもありますが、なるべくこうした自花受粉を避けています。雄花・雌花と別々の単性花にしたり、おしべ・めしべの熟す時期をずらしたり、また、風媒花・水媒花・動物媒花などの方法で、他の花の花粉で受粉しようとしています。

熟した雄花が転げ落ちて雌花に接触するといった、重力を利用したエノキグサの確実な受粉方法にはただただ驚嘆させられます。

それにしても、せっかく雄花・雌花に分けたのです。風や虫による受粉はしてないのでしょうか。あまり、虫が寄っている様子は見られませんが(篠原 智男)。

# コアシナガバチの観察日記

我家のベランダのバラの枝に小さい蜂の巣(直径2センチ位)を発見したのは今年の5月初旬だったように思う。時々ベランダに巣を作るコアシナガバチのようだ。1匹のハチが毎日せっせと巣作りに励んでいるようだ。

「みずみどり」2002年5月号に干場先生の講座のお話を紹介しながら、我が家での巣作りの様子を紹介しました。越冬から目覚めた親蜂(女王蜂)はたった1匹で巣を作り卵を生み、幼虫の世話をし、最初のハタラキバチが生まれるまでがとても大変、というお話でしたが、私が最初に見たときがその一番大変な時だったようです。

以下は、今年の家でのハチの観察日記です。

**6月3日** 前日に大雨降り、今は大風でバラの木が大きく揺れて倒れそう。蜂が必死でさがみついていたので、木を紐で固定した。ハチは私が近付き過ぎたためか刺しそうになったが、木はあまり揺れなくなった。木と巣の接着面も不安定なようだ。

**6月4日** 巣の「ふた」をしてあるものを発見、何時「ふた」をしたかは分からない。近日中第一子誕生か。不安定だった接着面も補強してあった。

**6月7日** 第一子誕生、巣の上でじっとしている。色は黄色のような茶色、親は濃い茶色、体も親よりは小さい。

**6月8日** 前日の大雨にも関わらず、親子とも元気、親蜂は朝から巣作りをしている。巣は木の皮などに唾液を混ぜて固め作るらしい。前日に誕生したハチは少しずつ動いてはいるが、まだハタラキバチにはなっていない。幾日ぐらいで労働に参加するのだろうか。

**6月9日** 今朝子供のハチ2匹になった。2匹ともじっとしている。

**6月10日** 最初に生まれた蜂が巣作りに参加している。6月7日に生まれたので働くようになるまでは3日かかるようだ。人間の子供は20年以上も働かないのに比べけなげなものです。

**6月11日** 最初の子は頑張っ巣作りに参加している。第二子はじっとしている。巣の上でじっとしている時の餌はどうするのだろうか。

**6月13日** 昨夜は大雨、気になって見に行くと更に1匹子供が増えて、親蜂と合計4匹となった。第二子も労働に参加するようになってきている。大雨の時はハチはどうやってやり過ごすのだろうか。同じベランダのハーブにアゲハの幼虫が2匹いた。小さくて鳥のふんみたい。

**6月14日** ハチの数が増えて巣作りのペース速くなった。一番高いところは5回建てになった。横にも広げているようだ。

**6月17日** 3匹で巣作り、夕方になるとじっとしているようだ。

**6月18日** 今朝は合計7匹になっていた。最初の頃生まれた蜂は色も濃くなって大きさも親蜂と変わらず、もうどれが女王蜂か分からなくなってしまった。女王蜂にペンキでも付けておけば良かった。大きくなったアゲハの幼虫がスズメに食べられてしまったようだ。もしかしたらハチが肉ダンゴにして幼虫に与えたのか。

**6月22日** ハチが更に増えている。10匹以上になっている。

**6月26日** アゲハの幼虫小さいもの4匹発見。

**6月27日** 蜂の巣はだんだんと色が濃くなって、黒光りしてきた。木と巣の接着面も補強されて壁のように付けられて丈夫そうになった。

**6月28日** 蜂の幼虫が巣の中で首を振るようになった。大きくなった幼虫はさなぎになる準備で、口から糸を吐いて巣にふたをするようだ。ハタラキバチが手を添えてサポートしているように見える。

**7月1日** ハチが巣を作ったところは洗濯物を干す場所、今日はハチに近づきすぎたためかハチが集団になって追いかけてきて右腕を3箇所刺されてしまった。刺された翌日は腫れあがり、医者に行きました。ハチにしてみれば、私は住居侵入のストーカーみたいなものなのかもしれないが、家主に対して失礼な奴だ。夫に言ったら「今度刺されたら俺に言え、スプレーでやっつけてやる」と言ったが、化学兵器で攻撃するとは卑怯者のする事。

ハチは10数匹となって巣も立派となり、私との力関係も逆転したのかもしれない。それからハチに近づく時は長袖、首にはタオル、帽子をかぶり洗濯のネットをかぶっています。

**7月3日** 大きくなった幼虫が首を振っている、糸を吐くところをみたいと思ったが、わたしの目には見えない。

**7月4日** だんだんと家が横に広がっていく。横に広がって行くと反った形になるそうです。総勢13匹が巣に留っている。外出中もいるから、もう何匹か分からない。

**7月5日** 糸でふたをした巣が動いている、羽化するのかもしれない。

**7月7日** 色の薄い子バチが2匹巣の上でじっとしている。子供が生まれるペースが上がってきて大家族になるのか。ハープの上ではアゲハの幼虫が大きくなってきた。幼虫がアゲハになれる確率は低いようです。ころころ太った頃をみはらかって鳥などが来て食べてしまいます。野性の世界はきびしいです。それで



写真上:6月9日、下:7月14日

も今年のアゲハ2匹が羽化しました。

### まとめ

コアシナガバチの巣作りはまだ発展途上です。ネットをかぶって観察を続けてみようと思います。巣が大きくなってハチの数が増えたら洗濯を干す時に困りますが。

約2ヶ月観察を続けてみて、1匹で巣作りに頑張る女王蜂をエライと思ったり、第一子の誕生を喜んだり、誕生から巣作りに参加するまで3日程かかるのを発見したり、大きくなった幼虫が首を振って糸を吐きさなぎになり、それを破って羽化したり、色々面白いものを見せてもらいました。このまましばらく観察を続けてみようと思います(瀬田政江)

## バッタ広場 植物の移り変わり

6月19日、すごく暑い日、調査は猪鼻さんと私の2人でした。

### 経過

2000年4月柵が完成

2003年4月 一面エノキが繁茂してきたので、1m以上の樹木を伐採。すぐにエノキが繁茂

2003年11月4月、南半分の樹木を根元から伐採、北側のアズマネザサも根元から伐採(北半分の樹木は切らずに放置)

強刈り込状態の草地から始まった激しい変化は、ひとまずおさまったように見えます。2003年11月に南側区域の樹木を根元から切った効果(影響というべきか)は大きなものでした。丈の高い草がわっと茂るともうエノキの大出現はなさそう。エノキの実生もあり、エノキの切り株にヒコバエのあるもの、ないもの、いろいろですが、南側は「草の勝ち」かな。

北側の未伐採区域(2003年4月に1m以上の樹木を伐採、11月には伐採しなかったところ)では、エノキは全体に大きくなっていますが、大きな変化に見えませんが、アズマネザサを切ったためか草本が増えています。

調査は、南北35mに糸を張り、その1m区間毎に植物種名(樹木は樹高も)を記録するものです。最初の方形区調査は定点がわからなくなり中断、糸上の調査に切り替えました。

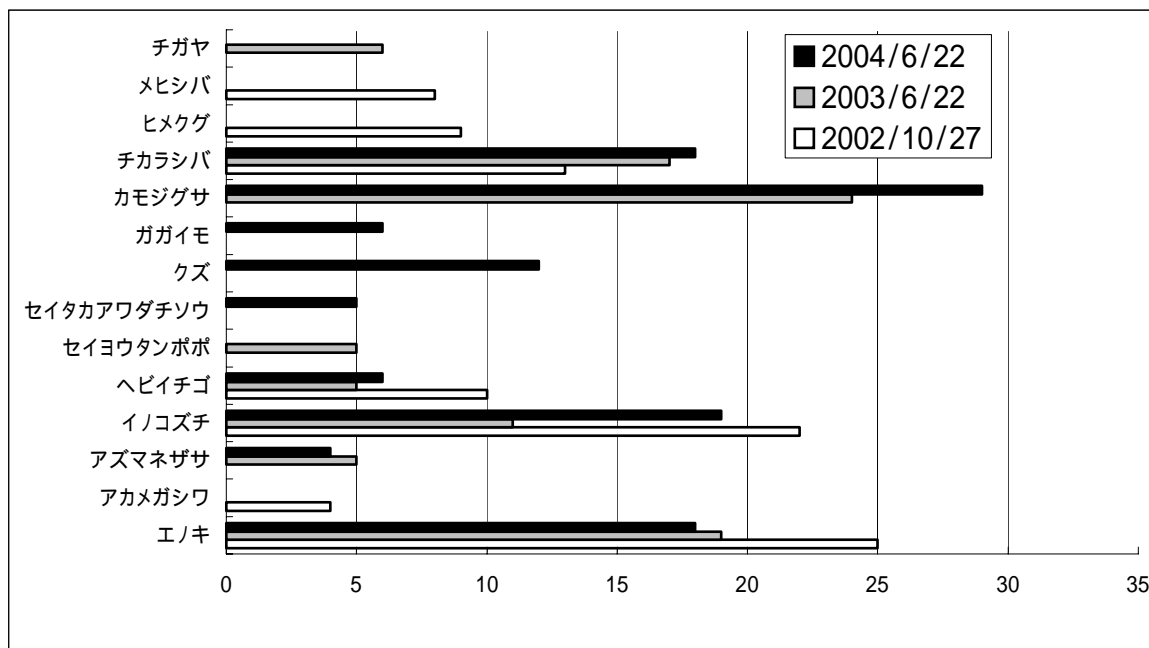
全体像をグラフで示すのが結構むずかしい。今回は出現頻度(本数ではない)をグラフにしました。35区間あるので全区間出現



手前は草刈りされた広場。  
左(南側)はエノキを伐採した区域。  
右(北側)11月にエノキを伐採しなかった区域

すると35。カモジグサ(花期が5 - 7月なので秋の調査では少ない)、エノキ、チカラシバ、イノコズチなどがまんべんなく出現しています。

訪れるたびに下手なパノラマ写真を撮っています。昨年は調査区域外でススキの穂がずいぶん出ていました。今年は調査区間でクズ、セイタカアワダチソウ、ガガイモが広がってきています。個別的な植物の記録と同時に、南区と北区に分けて、島井先生に教えていただいた被度で全体の傾向を記録したらよかった、と後で思ったことでした(坂本 郁子)。



## トンボ池にアオコが大発生

6月の調査では、BOD(水の汚れ)8以上と最悪の水質でした。水面一面に褐色の膜が張り、すくうと黄色い粒が付くので、黄色のアオコ(プランクトン)のようです。プランクトンは寿命が短く、大発生 死ぬ 腐る 大発生 を繰り返すと、水質悪化の悪循環になります。東京湾の赤潮と同じ現象です。

見次公園ではペンキを流したような緑色のアオコ(プランクトン)が見られるときがあります。大きな原因は釣りの餌(練り餌)で、これが水を汚すためです。魚が死ぬときもあります。

トンボ池は池自体が小さく環境の変化をもろに受けます。湧水で湧水水量は減っており、出口水路の地盤が高く水が滞りがち。池には大きなコイ、カメ、ザリガニがいて、その糞だけでもかなりの量(生き物を飼うと、彼等の排泄物で水槽がすぐに汚れるものね)。土の浄化能力も限度がある。水草が繁茂していれば栄養源として吸収し、水を浄化してくれるのですが、その水草はない。投げ込まれたホテイアオイは帰化植物だが浄化に役立つので除去しないで黙認することにしました。しかし、増えて困るはずのホテイアオイは目立たず、もしかして軟らかそうな根や葉がザリガニやコイのご馳走になったのでは？

# 活動のお知らせ

**運営委員会は毎月第1金曜日です。どなたでも参加できます。**

8月運営委員会： 8月6日(金) 18:30～20:30

9月運営委員会： 9月3日(金) 18:30～20:30

**いずれもエコポリスセンターです。**

**会報の印刷・発送は奇数月。お手伝いできる方は応援よろしく**

日時：9月15日(水) 18:00～ 場所：エコポリスセンター

**活動の問い合わせは瀬田まで(3969-7124)**

**毎月第4土曜日が定例の活動日です。この日は、赤塚や徳丸が原公園で私たちが作った自然の場所を中心に午前中は自然観察とゴミ拾い。必要な修理等があれば午後行います。観察会は原則として雨天も実施します。**

## トンボ池下流の水路の水の流れを改善する作業

アオコ対策で、池の水の入れ替わりをよくするための水路を掘り下げ作業です。暑いですが、体力と相談して参加してください。蚊に血を取られない対策も必要。

日時：7月18日(日)10:00～12:00 集合場所：美術館前トンボ池

持ち物：軍手、タオル、枝バサミ(ネットを切るため)、

## 7月の定例観察とゴミ拾い

水質も調べましょう。

日時：7月24日(土)10:00～12:00 集合場所：美術館前トンボ池

持ち物：軍手、双眼鏡、図鑑、ルーペ(あれば)、ゴミ袋、

## 8月の定例観察とゴミ拾い

日時：8月28日(土)10:00～12:00 集合場所：美術館前トンボ池

持ち物：軍手、双眼鏡、図鑑、ルーペ(あれば)、ゴミ袋、

## 赤羽自然観察公園鳴く虫を聞く会(夜の公園)

日時：9月5日(日)19:00～

場所：赤羽自然観察公園(東武東上線「ときわ台駅」から「赤53系統・赤羽駅西口行き」に乗り、「赤羽西都営住宅前」で下車すぐ。公園の上の入り口に出ます。)

主催：赤羽自然観察公園どんぐりクラブ

：問い合わせ・申し込み：釣巻 3961 - 2875

## 映像でつづる…すばらしき野生の世界

期間：7月29日(木)～8月1日(日)10:00～20:00

会場：文京区民センター

詳細は釣巻さんへ



2002 年 9 月 15 日

みずみどり第 33 号

---

—